SHOW-HEYシネマルーム

★★★

ボディビルダー
(Magazine Dreams)

2023年／アメリカ映画
配給：トランスフォーマー／123分

2025（令和7）年12月23日鑑賞	テアトル梅田

Data　２０２５－１２２

監督・脚本：イライジャ・バイナム
出演：ジョナサン・メジャース／ヘイリー・ベネット／テイラー・ペイジ／ハリソン・ペイジ／ハリエット・サンソム・ハリス／マイク・オハーン

みどころ

≪ボディビルダー版『ジョーカー』≫と全米が大熱狂！！！チラシのそんな見出しを見れば、それだけで本作は必見！「俺を見てくれ」との内面の叫びと共にパンツ１つでボディビルダーとしての素晴らしい肉体美（筋肉美）を見せつける「孤独な男」の純粋な夢が狂気へと変貌する姿は、如何に？

病気の祖父の介護をしながらボディビルダーとしての成功を夢に見て、日々ストイックな鍛錬を続ける主人公は真面目そのものだが、なぜセラピーを受けているの？彼の心はなぜそこまで病んでいるの？まずは、その姿を陰影のある美しい映像と、時折爆発する彼のパッションの姿からしっかりと！！

こんなに頑張っているのになぜ俺は・・・？それは誰もが抱く感情だが、それに振り向き、敬意を払ってくれないのが現実の社会。そんな社会への不平不満を誰にどう、ぶつければいいの？それがわからずに暴走すると、2026 年 1 月 21 日に判決言い渡しを迎える山上徹也被告のようなことになるのだが、本作の主人公は？

「強烈すぎる！息をのんだ」がVariety誌のコメントだが、さて、あなたの感想は？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■このチラシは少し誇大宣伝！？この写真の好き嫌いは？■□■

1967 年 4 月に大阪大学法学部に入学した途端に学生運動に入った私は、翌 1968 年 10 月、東大紛争中の東大に民生系の活動家の 1 人として入ったが、そこで駒場寮に入っている高校時代の友人がボディビル部に所属し、学生運動とは全く無縁な状態でボディビル活動をしている姿に驚かされた。

私はボディビルダーの筋肉美やその大会の様子をニュースで数回見たことがあるが、女

性版のボディビルダーのそれを含めて、私はあまり好きではないし、見たいとも思わない。したがって、本作が公開されることを知ってもあまり興味がなかったし、チラシに映る主人公の姿にも特段の魅力を感じることもなかった。

しかし、本作のチラシには、「『ナイトクローラー』製作陣が放つ衝撃作　孤独な男の純粋な夢は、凶器へと変貌する」の見出しが躍っていたから、これは面白そう！さらにチラシには、「《ボディビルダー版『ジョーカー』》と全米が大熱狂！！！」、「傑作　★★★★★Hollywood Reporter」、「強烈すぎる！息をのんだ　★★★★★Variety」、「痛々しいほどにリアル　★★★★★The Guardian」の見出しが躍っていたため、「こりゃ必見！」と思ってスクリーンに臨んだが、私見ではこのチラシは少し誇大宣伝！？あなたはチラシに写る主人公の肉体美（筋肉美）に魅力を感じる？感じない？

■□■原題は『Magazine Dreams』。その意味は？■□■

本作のパンフレットにある Introduction によれば、本作のテーマは、「俺は必ず、世界一のボディビルダーになる－栄光を夢見る孤独の男は、肉体と心を極限まで追い込んでいく･･･」というものだ。本作の原題『Magazine Dreams』。これは、ボディビルダーたる主人公が雑誌の表紙を飾ることを唯一無二の目標としていることから付けられたものだ。

他方、本作は「あまりに凄絶な筋トレシーンと観る者を圧倒する殺気に満ちた熱演で、予告編が公開されるや SNS から一気に火が付き、全米で大熱狂を巻き起こした」そうだ。そして、「美しくも破滅的な不穏さを放つ映像と、人間の心の奥底まで潜り込んでゆく容赦のない心理描写は、大手海外メディアで『『ジョーカー』のような鋭さ（The Guardian）』、『『タクシードライバー』のトラヴィスを超えた（IndieWire）』と称賛を浴びた」そうだ。『ジョーカー』（19 年）（『シネマ 46』20 頁）も『タクシードライバー』（76 年）も歴史に残る名作だから、このように対比される本作もきっと名作！

■□■ボディビル大会と専門用語をどう受け止める？■□■

アメリカの片田舎で、病気の祖父を介護しながら暮らす青年キリアン（ジョナサン・メジャーズ）は、低収入で友人も恋人もおらず孤独な日々を送っているものの、一流ボディビルダーになり、その鍛え上げた肉体で雑誌の表紙を飾るという夢に向かって全てを捧げ、過酷なトレーニングと食事制限に打ち込んでいた。ところが、その反面、身体は悲鳴を上げ、社会の不条理と孤立が彼の精神を蝕んでいくことに・・・。本作導入部では、そんな物語が進んでいくが、他方で、理想のボディビルダー、ブラッド・ヴァンダーホーン（マイク・オハーン）最大のファンを自認するキリアンが、彼宛ての手紙（ファンレター）を書き続ける姿も。

さらに本作導入部では、キリアンが出場したボディビル大会のシークエンスが登場する。そこではさまざまなボディビルの専門用語が語られるが、それを理解できる観客はほとんどいないはずだ。他方、本作には、ブラッド・ヴァンダーホーン役として「俳優、ボディビルダー、モデル。世界的なボディビル大会『ミスター・ユニバース』として 4 回優勝し

た経歴を持つ」マイク・オハーンが登場し、重要な役を演じるのでそれに注目！さらに、日本人のボディビルダー、山岸秀匡が日本語字幕監修としての役割を担ったそうだが、その意義は？

キリアンはあるボディビル大会で 6 位に入賞したそうで、一方ではそれを前向きに捉えていた。ところが、そこで審査員から「三角筋が貧弱だ」と言われたことに彼はひどく傷ついていたらしい。そのことは、ある精神科医（?）のセラピーを受けているキリアンの姿を見ればよくわかるが、その病状はどの程度？そんなキリアンの繊細な気持ちを理解するためには、ボディビルの専門用語の理解が不可欠だが、中盤に登場しキリアンの恋人になりそうになるジェシー（ヘイリー・ベネット）と同じく、一般の人々がそれを理解するのは到底ムリ・・・。

■□■努力しているのに！？社会が悪い！不平不満をどこへ？■□■

本作には、「俺はこんなに雑誌の表紙を飾るという目標に向けて禁欲的に努力を続けているのに、なぜ社会はそれを認めてくれない？」とのキリアンの不平不満が充満している。ベトナム戦争で父親を失った悲しみを胸に秘めながら、病気の祖父を介護している姿を見れば、彼は社会的には一見「いい奴！」だ。しかし、いくらファンレターを書いても返事をくれないブラッド・ヴァンダーホーンに対するイラつきや、ボディビル大会で「三角筋が貧弱だ」と文句をつけられた審査員に対する怒りは相当なものらしい。

また、買い物に行ってもレストランで食事しても、店員やウェイトレスが自分に対して適切な敬意を払わないことに彼はどうにも我慢できないらしい。さらに、家の修理をした内装業者にその不十分性を指摘し、手直しを丁寧に要請したにもかかわらず、それを無視されると、そんな理不尽な対応とそれを許容している理不尽な社会そのものに怒りが込み上げてくるらしい。

1967 年に大阪大学に入学した私はすぐに学生運動に入ったが、その動機の一つは世の中の矛盾や問題点についていろいろと教えられ（吹き込まれ？）、その改善・改革のため、そして革命のために一人一人が行動すべきと教えられた（吹き込まれた）ためだ。このように、当時の学生運動は社会への不平不満を「個人的なものから社会的なものに転化していく」という目的があったが、本作を観ていると、キリアンの社会に対する不平不満はキリアン個人の内面に入り込んでいくばかりだから始末が悪い。

経済格差や人種差別が蔓延しているアメリカでは、キリアンのような黒人がまともに生きていくのはそれ自体が大変。その上、ボディビルダーとしての成功を夢見ている彼の理想はメチャ高いから、それに向けた努力は続けているものの、そのストレスは大変なものだ。しかも、彼の肉体は強靭だから、一旦精神がキレて肉体の暴走が始まると、そりゃハチャメチャ。その結果、ある日、彼が内装業者に対して取った行動とは？

■□■ボディビル大会の結果は？その後の行動は？■□■

前回のボディビル大会で 6 位に入賞したキリアンは、次の大会に向けて夢をかけていた

が、その当日、あの内装業者から殴る蹴るの暴行を受け倒れ込んでしまったから、さあ大変。血を流したまま何とか会場に駆けつけ、舞台には間に合ったものの、キリアンは演技の途中で倒れ込んでしまったから、これにて彼の夢は完全にアウト！？「俺はこんなに努力しているのに、一体なぜ？これはすべて社会が悪い！」。キリアンがそう思い込んでいること確実だが、果たしてそれは正しいの？

世間の注目を集めた安倍晋三元総理の銃殺事件の裁判は、2025年12／18に結審し、2026年1／21に判決言い渡しが予定されている。私の予想は求刑どおりの無期懲役で、弁護側の情状酌量による減刑の要請は認められないはずだ。山上徹也被告は旧統一協会に対する不平不満を最終的に同協会に大きな影響力を及ぼした政治家・安倍晋三に向けた上、自作の銃で撃ったわけだが、さて、ボディビル大会での惨憺たる結果を受けて、次にキリアンが取った行動とは？日本では銃を持つこと自体が大変だが、アメリカではお店でも買えるし、ネットで簡単に入手することもできる。その結果、今、キリアンが手にしたものは・・・？

■□■主人公の孤独な内面はカメラワークと映像の美しさで！■□■

本作はもちろんカラー作品だが、ボディビル大会で舞台に当てる照明や、一人で孤独な練習をしているキリアンを映し出す照明は、明暗を強調したモノトーンに近い色彩感が際立っている。ライトの先に映るボディビルダーたちの肉体（筋肉）を美しいと思うか否かは人それぞれだが、本作ではそんなシーンを中心とするカメラワークと映像の美しさが売りだ。それはもちろん、大きな悩みを抱きながらも孤独なトレーニングに黙々と励むキリアンの内面を浮かび上がらせるためだから、本作ではそれをじっくり味わいたい。

そのことについて、本作のパンフレットの「INTRODUCTION　イントロダクション」では、「美しくも壊滅的な不穏さを放つ映像」と書かれているし、「DIRECTOR STATEMENT　監督声明」では、「照明はごく自然風にしながら、ほんの少し印象派的なタッチを含ませて、キリアンの苦悩する心象風景を描き出しました。キリアンが持つ捉えどころのない、どこか得体の知れない不穏さを人に感じさせる性質が、やがて映画全体にじわじわと染みわたっていきます。色調は皮膚に浮かぶ痣を思わせるような色彩でまとめました。」と書かれている。さらに、「DIRECTOR INTERVIEW　監督インタビュー」では、「撮影の美しさも印象に残ります。インスピレーションを受けたアートがあったら教えてください。」との質問に対して、「主なインスピレーションは、雑誌の表紙のような光沢のある深い色調です。」と答えている。

他方、『キネマ旬報』2026年1月号の「REVIEW 外国語映画」のコーナーで、湯山玲子氏（著述家、プロデューサー）は、「手負いの獣のような野生をほぼ夜間のほの暗い照明の中に浮かび上がらせるそのムードや良し！」と書いている。私は本作の映像美についての上記の見解に全面的に同意！

2025（令和7）年12月26日記